宿場町
ひらかた

第８９号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　堀家　啓男
072-892-5504

事務局
枚方市出口２丁目6-6
上野幸夫　072-832-5722

編 集 広報委員会

## 主な内容

○ 東海道シンポジウム開催（1頁）
○ 東海道シンポジウム内容（2頁～5頁）
○ 神仏習合と廃仏毀釈（6頁～12頁）
○ 小浜宿と多田銀銅山（13頁～15頁）
○ 橋本から楠葉への史跡（16頁～20頁）

### 歴史の道東海道宿駅会議主催

# 東海道シンポジウム
# 石薬師・庄野宿大会が開催

本会が平成25年から加入しているＮＰＯ法人「歴史の道東海道宿駅会議」主催による第31回東海道シンポジウム「石薬師・庄野宿大会」が平成30年10月18日に鈴鹿市文化会館「けやきホール」で開催されました。

「東海道シンポジウム」とは、旧東海道沿道の57宿場町の関係者が一堂に会し、東海道が結ぶ人・物・文化の交流を図り、これらの道づくり・街づくり、ひいては人づくりの一助になることを期待して年1回開催されているものです。

今回の開催地となった石薬師（いしやくし）宿は東海道57次の44番目、庄野（しょうの）宿は45番目の宿場で、両宿とも三重県鈴鹿市にあります。

この大会には、枚方市から本会のほか、枚方文化観光協会、枚方観光ボランティアガイドの会から17人が参加しました。（内容は次頁から）

ちなみに平成24年11月には25回大会として「枚方宿大会」が開催されています。

会場内の様子

## 第３１回東海道シンポジウム

# 石薬師・庄野宿大会に参加

門真市　辻他　久雄

江戸時代の浮世絵師である歌川広重が描く「東海道五十三次之内・庄野の白雨」をご存じの方も多いかと思います。彼の作品の中でも、傑作中の傑作といわれ、世界的にも高い評価を得ています。

庄野宿資料館に掲示されている
「東海道五十三次之内・庄野の白雨」

今年の東海道シンポジウムは、その絵が描かれた宿場のある三重県鈴鹿市で開催をされました。鈴鹿市には、東海道のもう一つの宿場「石薬師宿」があります。今回のシンポジウムへの参加は、この二つの宿を擁する鈴鹿市に向けての道中から始まります。

柿の実が色づき始める季節、爽やかな秋晴れの日となった10月18日、参加者はラポール横に集合しました。今回、枚方市からは「枚方文化観光協会」「枚方観光ボランティアガイドの会」、そして「宿場町枚方を考える会」から総勢17人が参加しました。比較的近場ということもあり、また移動も電車で行くよりも融通が効くであろうとのことで、マイクロバスをチャーターしての日帰り参加となりました。

道中のバスでは、和気あいあいの雰囲気の中、用意していただいたプリントを見ながら「石薬師・庄野宿」についての簡単な予備知識を学習しました。

鈴鹿の山並みが遠くに見える新名神の鈴鹿インターを降りました。会場に行く前に私たち一行は、「庄野宿資料館」に立ち寄ることにしました。

資料館の話をする前に、ここで少し「庄野宿」と「石薬師宿」の説明を簡単にしておく必要があるかと思います。近世の宿駅としては、石薬師と次の庄野の両宿の設置はかなり遅れています。二つの宿は、それぞれ東海道四四次と四五次にあたります。

石薬師は元和2年（1616年）、庄野は遅れて寛永元年（1624年）であります。これは、四日市と亀山との宿間距離が五里を超えていて、人馬などの継立て負担が大きかったことによるものとされています。

しかしながら、石薬師村と庄野村は元来小村であり、近在より人家を集めて宿立てし

ています。庄野に至っては、「草分け三六戸、宿立て七〇戸」といわれ、鈴鹿川東の古庄野から移った人たちを合わせて70戸で宿立てをしたといわれています。両宿とも総家数は200軒余り、人数は千人にも満たなかった宿であったようです。旅籠の総数はともに15軒で、「五十七次」ではもっとも少なかったようです。また、常備すべき人馬は、寛永年間以降は各宿とも百人・百疋と定められましたが、この両宿の場合は利用者が少ないと幕府に難渋を申し立て、幕末近くには35人・40疋に軽減されています。

宿の利用者が少なかった理由としては、ルート的にこの宿が内陸部にあり、東海道から分かれて伊勢湾沿いの伊勢街道を行く伊勢詣での人々が利用しなかったことや、遠く関西方面からの伊勢詣のルートであった伊勢本街道や参宮街道とも離れていたことが、少なからず影響していると思われます。

さて、ここで話を「庄野宿資料館」に戻します。「庄野宿資料館」は、庄野宿に残る膨大な宿場関係資料の活用と旧小林家（市指定文化財・元問屋）の保存を図るため、主屋の一部を創建当時の姿に復元して、平成10年に開館したものです。

庄野宿資料館

館内には、庄野宿の本陣・脇本陣文書、宿駅関係資料を始め、地域に残る民具、農具、日用品なども展示されています。圧巻は、幕府の御触書や掟書などを板札に墨書きして掲げた「高札」が展示されていることです。

高札

庄野宿の高札場は、本陣と脇本陣の間にありました。多くの場合、新しい高札が届くと古い高札は破棄されますが、庄野宿には天和2年（1682年）の高札が残されており、全国的に見ても例が少ないものです。資料館には5枚も保管されており、大きいものは長さが8尺5寸もあり、これは一見の価値があります。

資料館を一歩外に出ると、そこには真っ直ぐに延びた旧東海道の名残が色濃く残っています。人影のまばらな庄野の町並みもまた、往時の面影をよく残してくれています。残念ながら建物は残ってはいませんが、問屋場跡や本陣跡をうかがわせる石標や説明板が設置されています。

本陣跡碑

宿場のほかに、一里塚や常夜灯などがあり、当時の人々

の往来を彷彿とさせてくれます。普段気にも留めず見過ごしていた小さな道標や石造品を、かつての旅人になった気分で歩きながら見ると、町歩きも一層楽しくなるのではないでしょうか。

さて、いよいよ本題です。今回の東海道シンポジウムの会場になっている鈴鹿市文化会館けやきホールに到着しました。すでに会場は大勢の東海道各宿場町関係者の熱気で溢れていました。それぞれの宿場町をアピールするための趣向を凝らした宿場名や図案などの入った法被や衣装を着た人たちから、私たちも熱い歓迎を受けました。

開会に先立ち、旧石薬師村の出身である歌人でもあり、かつ万葉集の研究者として不滅の大業というべき「校本万葉集」を刊行するなど、万葉集の研究と普及に尽力した佐佐木信綱の作詞になる、唱歌「夏は来ぬ」の全員合唱から始まりました。なんとも郷土愛と温かみの感じられるお出迎えではないかと、いたく感動しました。

夏は来ぬ

佐佐木信綱作詞
小山作之助作曲

卯の花の　匂う垣根に
時鳥　早も来なきて
忍音もらす　夏は来ぬ

さみだれの　そそぐ山田に
早乙女が　裳裾ぬらして
玉苗植うる　夏は来ぬ

橘の　かおる軒端に
窓近く　蛍とびかい
おこたり諫むる　夏は来ぬ

大阪に戻ってからも暫くは、この「夏は来ぬ」の歌詞とメロディが私の頭の中を巡るのでした。また余談ではありますが、この曲は２０１５年３月14日に開業した北陸新幹線の「上越妙高駅」の発車メロディとして使われていることを皆さんはご存じでしたでしょうか。一度立ち寄られることがありましたら、是非とも確認していただければと思います。

そんな和やかなオープニングの後、開会のセレモニーにおいて、大会のシンボル像でもある「旅路の像」が、昨年の開催宿であった草津宿から今回の石薬師・庄野宿の代表者に受け渡されました。主催者、来賓の挨拶の後、二つの宿からの基調講演に移りました。

石薬師からは、「信綱かるた道」と題して、林詔幸氏の熱の籠った講演がありました。佐佐木信綱の生い立ちや生涯の功績に始まり、東海道石薬師宿の街道筋や名所旧跡には信綱の作った歌が掲示されていることが紹介されました。

「信綱かるた」は、郷土が生んだ歌人・文学者である佐佐木信綱を顕彰し、後世にその偉業を伝える趣旨で、平成15年暮れから平成16年の12月の完成まで、およそ1年の歳月をかけて作られたものだそうです。今ではその「信綱かるた」を鈴鹿市の小・中学生や町の人たちが暗記して、かるた遊びに興じているとのお話も、町づくりを考える上で興味深いものでした。

このかるた作りに関して、ヒントとなったのは、こよなく酒や　人、自然や旅を愛した歌人ともいわれる若山牧水の「牧水かるた」であったとのことです。蛇足ではありますが、私の好きな信綱と牧水の歌を挙げて見たいと思いま

す。皆さんはさてどんな歌がお好きでしょうか。

願はくはわれ春風に
身をなして
憂いある人の門をとはばや
信綱

幾山河こえさりゆかば
さびしさの　はてなん
国ぞきょうも旅ゆく
牧水

続いて庄野からは、「庄野宿から望む白鳥塚」と題しての川北富夫氏の講演がありました。鈴鹿山麓の一帯には、古代の英雄ヤマトタケルの伝承地がたくさん存在しています。加佐登神社の境内の裏にある県指定史跡の「白鳥塚古墳」もその一つです。

景行天皇の皇子として生まれた彼は、父の命に従い日本の東と西に遠征します。西の熊襲と東の東海道12国を冒険し、数多くロマンの跡を残しています。文献的には、「古事記」と「日本書紀」ですが、この両者には内容の異なる点が随分あります。

白鳥塚の形状は、円墳で直径は東西78メートル、南北60メートル、高さは約13メートルであることが調査からわかっています。県内で最も大きな円墳です。白鳥塚をヤマトタケルの墳墓として賛同する学者も多くいます。

「東海道名所図会」の中の「日本武尊陵白鳥塚」や「五十三次名所図会四十六「庄野白鳥塚古跡」のように庄野宿辺りの名所としても描かれていることがわかります。

このように近世の宿場としての庄野だけでなく、古代のロマンスが詰まっている郷土の素晴らしさを、時には朗々と古事記に出てくる故郷を思い、ヤマトタケルが歌った歌を吟ずることを交えながら、淡々と物静かな中にも、熱い思いを込めてお話されました。

閉会に先立ち、宿場旗が石薬師・庄野宿から次回、「第32回東海道宿駅会議　東海道シンポジウム」の開催地となる「藤枝宿」に手渡され、大会一日目の幕を閉じました。

終了後、舞台上から下りてきた「けやきホール」の緞帳は、唱歌「夏は来ぬ」の歌の抒情的な風景・世界を色彩豊かな織物で表現した素晴らしいものでした。また、ホールの出た辺りには、大きく立派な石に刻まれた歌碑が建てられていました。

鈴鹿市の人たちは、事あるたびに、これら豊かな自然溢れる郷土が育んだ素晴らしい文化に親しみ、自らの誇りとされていることに深い感慨を持ちました。

唱歌「夏は来ぬ」の歌碑

おわりとして、地域の歴史を知り、地域の歴史遺産を活かしていくことの大切さを実感した今回の参加でした。また、地域が成り立った歴史に学び、史跡・旧跡の保存だけでなく、その街に暮らす人々や自然環境も構成要素とした「町づくり」をめざしていかなければとの思いをより一層深くしました。

河内名所図会に見る

# 神仏習合と明治の廃仏毀釈

交野市　堀家啓男

## 神仏分離の嵐

明治１５０年を迎え改めて明治維新の意義が論議されています。忘れてならないことは同時期に生じた廃仏毀釈のことです。明治初年（１８６８年／慶応４年）、新政府により、天皇中心の国家確立のため神道国教化（国家神道により人心の統合を行うこと）が図られ、古代の官制である神祇官が復活、神社における神仏を分離する布告が出されます。これがきっかけで過激な国学者や一部神官の暴走が起こり神仏分離、釈迦の教えを毀すという激しい嵐が吹き荒れ、各地の社寺や庶民にも大きな影響を及ぼしました。

終息するまでのわずか数年、古代から江戸時代末まで続いてきた神社の神仏習合が一挙に見直され、全国各地で神仏分離、廃仏毀釈が勧められました。仏教文化を受け入れ育んできた日本文化の一面を崩壊させ、多くの貴重な建造物や文化財が失われ、日本人の精神的な在り方にも大きな影響を与えました。

春日大社と一体となっていた興福寺では、僧はことごとく還俗、神勤めとされ、寺は無住となり荒廃しました。五重塔はスクラップとして売りに出され、50円で落札、処分される寸前だったという話は有名です。

## 神仏分離の始まり

慶応４年（１８６８年／明治元年）３月17日、生まれたばかりの新政府の神祇事務局（神祇官）から神仏判然に関して全国の諸社へ通達が出されます。これが神仏分離の始まりでした。

このお達し、「各神社で、僧形のまま別当や社僧と称して従事している者は還俗すべきこと。還俗に差しさわりのある者は申し出よ。還俗した者は僧位、僧官の返上はもちろんである。官位は追って沙汰する。とりあえず白い衣服で神社にて勤仕せよ」により神宮寺（宮寺）の僧侶がまず神社から排除されました。同月28日の太政官布告では、「古くから某権現あるいは牛頭天王など仏語をもって神号としている神社はこれを廃止し…」、さらに同年中に10に達する法令を出して「仏像を神体とすることを禁じ、鰐口、梵鐘、仏典などを神社から一掃し、菩薩号を廃止…」、修験道の廃止など、村の鎮守にいたるまで牛頭天王や祇園、八幡菩薩など仏語、仏意による祭祀を禁止、改名させ、神社

にある仏堂、仏具を取り除き、神仏を判然分離させたのです。徹底した神仏分離により、全国いたるところで大きな混乱が生じました。

## 神仏習合の略史

仏教は6世紀半ばくらいまでに（仏教公伝は欽明天皇の時代で538年または552年）中国や朝鮮半島から日本に伝えられました。それまで日本人が信じていた宗教は自然崇拝の神で、自然現象や岩などに宿るとされ、五穀豊穣や村の繁栄を祈りました。

仏は、始め日本人にとって異質の存在でしたが、日本人の寛容さのなかで伝統的な神の線上におかれ、神と異ならない蕃神（あだしくにのかみ）として受容されます。ヤマト王権内の豪族たちの間でも先進の大陸文化を伴っていた仏教を積極的に取り入れようとするものも現われ、在来の神々を信じるものとの間で論争が起りました。天皇家を巻き込む権力争いも加わり、蘇我氏と物部氏のように戦争へ発展することもありました。

6世紀後半のことです。大化改新（645年）以降も天皇家を中心に、仏教は日本の風土にあったものに変容しつつ、行基の活躍などもあって庶民にも普及していきます。

8世紀半ば、奈良時代、聖武天皇は先進文化をもった仏教による鎮護国家を祈り、仏教興隆のため大仏建立（747年）を行います。このとき宇佐神宮（大分県、八幡宮や八幡神社の総本社）の神が全国の神を総動員して大仏建立に協力すると託宣を出し、シャーマンのような女性を先頭に上京、建立を手助けしました。神が仏教を助けたのです。東大寺の完成後、境内に守護神として手向山八幡宮（宇佐八幡宮から勧請、797年に創建）が設けられ習合が図られます。他の大きな寺でも進みます。

9世紀半ばにかけて、有力な神社の周辺に「神宮寺」と呼ばれる寺院が建立されるようになります。宇佐八幡宮には「弥勒寺」という神宮寺が建立されます。神もまた人々の救済に疲れ煩悩をもつようになり、仏の救済を求め、神身離脱し仏教に帰依すると信じられたのです。さらに宇佐八幡神は、仏教的な「宇佐八幡大菩薩」と呼ばれるようになります（781年頃）。

平安京になって裏鬼門よけに宇佐から勧請された（859年）石清水八幡宮は「八幡大菩薩」として天皇家の信仰も厚く、王城鎮護の役割を果たします。御神体として仏教と結びついた僧形の八幡神像がつくられ信仰されます。

平安時代半ばの10世紀には神仏習合はさらに進み、「本地垂迹（ほんちすいじゃく）説」があらわれます。仏こそ神の「本地」で、神は仏の仮の身「垂迹」であるとして、それぞれの神に対して本地である仏が決められます。神を拝むことは、すなわち本地である仏を拝むのと同じというのです。

熊野三山の祭神について、それぞれ阿弥陀如来、薬師如来、観音菩薩があてられ、皇祖神天照大神には大日如来などがあてられました。神々は仏教に吸収され、以後、中世の宗教の基調として江戸時代末まで続き、人々は神を通じて仏を信仰しました。近世に

は村の隅々にもこの神仏習合信仰が広がり、鎮守でも仏教的な神号が生まれ、神宮寺の僧が社務を行い、神に祈りました。境内に釈迦堂や薬師、観音、地蔵堂などが建ち、人々は手を合わせて病気回復や幸せを祈りました。これが近世の普通の村の光景となりました。

幕末から明治初めの頃、武家が天下を支配し続け、幕末の混乱が生じたのは神仏習合で、本来の神の存在が脅かされたことによるとし、新政府の方針として神の本来の姿に戻り、天皇を中心に国家神道による人心の統合で国家を立て直すということになります。

そこで活動したのが明治初めの神仏分離、廃仏毀釈の運動家たちでした。寺との関係がよくなかった一部の庶民もこの運動に動かされました。

新政府は、無住、無檀の寺の統廃合を進め神社から仏教色を一蹴しました。さらに西欧諸国からキリシタンの禁令を解くよう求められていた新政府は、庶民への急速な普及を恐れて拒み続け、まずは国家神道による人心統合を優先しました。このことも神仏分離を加速しました。

## 枚方での神仏習合と分離

明治初めの神仏分離は枚方でも例外ではありませんでした。旧枚方で21寺が廃寺（枚方市史第4巻に掲載）となったそうです。近世の北河内地方の光景を描く「河内名所図会」を見ながら、いくつかの神社の習合時代と現在を比べてみましょう。

### 蹉跎神社

名所紹介のガイドブック「河内名所図会（享和元年1801年）」をみると、名所として現在の蹉跎神社である「蹉跎（山）天満宮」が掲載され、習合時代の姿がよくわかります。

菅原道真公を慕って追ってきた息女刈屋姫が足摺りしたことに因み、蹉跎山と名付けられた丘上にある柿葺き（こけらぶき）の本社、役小角を祀る「行者堂」、社前には、「絵馬堂」「神楽所」があります。石段を下りた鳥居のある広場には瓦葺きの「観音堂」、その奥に当時「龍光寺」と呼ばれた宮寺（神宮寺）の庫裏（わら葺き）があります。前方には鐘楼もあります。

現在の神社は明治期に建て替えられ瓦葺です。行者堂はなく、別の摂社があります。神楽堂はかなり傷んでいます。石段を降りる途中に消防展示のある明治期の絵馬堂がありその下の鳥居のある広場には、旧龍光寺の本堂などが火災で焼失し、その後に再建された神社の社務所があります。観音堂や鐘楼はありません。鳥居の神額には「蹉跎天満宮」の宮号が残っています。

旧枚方市史（昭和26年／1951年）によれば習合時代、神社は「蹉跎（山）天満宮」と呼ばれていました。配所（大宰府へ左遷901年）にあっ

た菅原道真公が自ら刻んだゆかりの神像を祀り、天暦5年（951年）、村上天皇の時代に創始されたとのことです。七百五十年祭（承応元年1652年）以降も五十年ごとに御忌祭が行なわれ、明治34年（1901年）には一千年祭が挙行されたそうです。

宮寺、旧法雲山龍光寺は真言宗仁和寺末で、縁起によれば推古天皇の御宇、聖徳太子の創建による七堂伽藍の霊地とされ、延暦4年（785年）火災により焼失、大同元年（806年）釈迦堂（本堂）、観音堂が再建されたとのことです。これをみると天満宮が創始されるより前に旧龍光寺があったことになります。その後、慶長の末年、兵火で神社ともども焼失し、再建され、その後、中振、出口の2村の氏神となってから神社の神宮寺となりました。

代々の社僧が別当となり社務を奉仕しましたが明治元年（1868年）4月、神仏分離により宮寺たる関係を失い同6月社僧は退寺し還俗、帰農、2年後、大阪へ引っ越したそうです。同6年（1873年）、堺県の触れにより無檀無住として廃寺となります。本堂、その他諸建物は55円で売却、金子は3ヵ村立ち合いで区長へ上納されました。

仏像、寺宝は東隣の浄土院（中振　浄土宗）に移され、釣鐘は明治15年（1882年）に円養寺（中振の浄土真宗本願寺派）に売却されました。

## 意賀美神社

「河内名所図会」をみると現在の意賀美神社（延喜式内社）がある万年寺山に「牧方萬年寺」が掲載され、習合時代の「牛頭天王本社」と「旧萬年寺」の姿が見られます。

現在の意賀美神社本殿と社務所のある台地にかつての「牛頭天王社」、拝殿があり、石段を下ったところ、現在の梅林がある台地に、当時梅林はなく役小角を祀る行者堂のほか「観音堂」「薬師堂」「十三重の石塔」そして奥まって数棟の瓦葺の宮寺の庫裏と鐘楼があり、築地塀と思われる塀が描かれています。相当大きな寺であったことがわかります。台地の入口には鳥居があります。参道などの形態は現在とよく似ています。「牛頭天王本社」（祇園社ともいいました）は明治になって神仏分離で改名され旧須賀神社となります。伊加賀北町の宮山にあった旧意賀美神社は明治42年（1909年）10月、旧須賀神社及び岡の旧日吉神社と合祀し、もとの旧須賀神社（もとの「牛頭天王社」）の本殿を新意賀美神社の本殿として遷座しますが、室戸台風の時（昭和9年／1934年）大破し、改修後、今日にいたります。

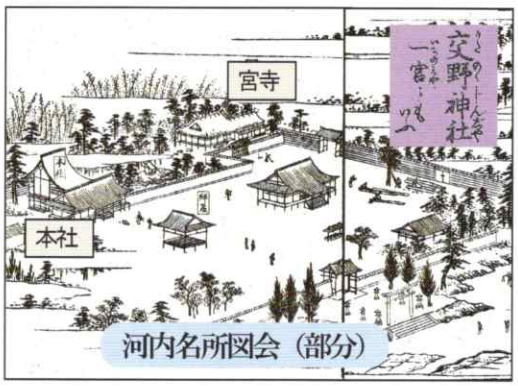
旧枚方市史の記述では旧萬年寺は「長松山萬年寺」と称し真言宗醍醐寺末です。推古天皇の御宇、高麗の僧が来朝し、当地の風光をめでて草庵

を結び、その後貞観2年（860年）、醍醐の聖宝上人が伽藍を創始し、貞観10年（868年）には悪疫流行の終息祈願のため同上人が「牛頭天王社」を奉祀したとしています。寺が神社より先に創始されていたことになります。寺伝では「渚の院（なぎさのいん）」に来た惟喬親王が御狩のとき寵愛する鷹がこの山の松に巣をつくったことや時に親王も休息されたことに因み山号を長松山としたということです。明治3年（1870年）旧萬年寺は廃寺となります。無檀であったことが理由となったようです。社僧を勤めた僧のその後についての記録は全く見られません。いま意賀美神社を訪ねると参道近くに旧萬年寺の標柱と石段、そして十三重石塔の一部がかろうじて残っています。旧萬年寺の観音堂（7円75銭）、行者堂（3円50銭）、庫裏（2円50銭）は入札に付されたということです。鐘楼は三矢の浄念寺（浄土真宗本願寺派）に移され、今も同寺にゆかりの仏像が保管されています。

伊加賀宮山にあった旧意賀美神社は開化天皇の御世伊香色男命（いかがしこおのみこと　物部連の祖とされる）の邸内にあったといわれ、淀川を見下ろす枚方丘陵の伊加賀崎突端の旧址（伊加賀北町）に今も水道局配水池跡地として残っています。旧址に立てられていた「式内意賀美神社址」碑は現在の意賀美神社境内にあります。習合時代、地元の人は御手洗大明神や牛頭天王と呼び、古文書では改修時の遷宮導師を旧萬年寺の住職が勤めた記録があります。明治34年（1901年）に宮山の旧意賀美神社へ奉納された絵馬には華麗な旧意賀美神社の建物や伊加賀村の光景が描かれています（鍵屋資料館展示）。合祀された旧日吉神社は習合時代、「山王大権現」と称し、現在、「日吉神社旧跡」の碑がある地点の向かい側、別子山（岡南町　現在は公園）の丘上にありました。

## 片埜神社

河内名所図会には「交野神社、一宮ともいう」として掲載され、習合時代、片埜神社は「一宮牛頭天王」と呼ばれ、仏教的習合神「牛頭天王」を祭っていました。図会には西側に柿葺きの「本社」、瓦葺の「拝殿」があります。境内には舞台、その右寄りに大規模な瓦葺建物があります。これには説明書はありませんが、牛頭天王の本地とされた帝釈天や薬師、四天王、地蔵を祀る帝釈（天）堂だということです。また東北隅には茅葺きの神宮寺「宮寺」があります。



河内名所図会（部分）

片埜神社を訪ねてみると神仏分離の結果、帝釈堂や宮寺はありません。修復された美しい檜皮葺の社殿が際立ちます。しかし拝殿の前の石灯篭は鎌倉時代末の作ということで、習合時代の仏教的特徴があります。小社の前に依姫明神の石柱、神宮遥拝所の奥に

は「一宮牛頭天王」の神号の石塔が残り、旧京街道から旧坂村に入る分かれ道には「左帝釋天参道」の古い道標が残っています。ゆっくり巡るとあちらこちらに習合時代の面影があります。

旧枚方市史によれば、片埜神社は用明天皇の朝、聖徳太子の懇請で社殿造替の上、一宇を建て帝釈天、四天王を祀り国家鎮護の社とされたとのことです。

由緒によれば垂仁天皇のとき野見宿祢が初めて建立したとされます。兵火により焼失を繰り返し、豊臣秀吉の時鬼門鎮護の社として修築、さらに慶長7年（1602年）秀頼が片桐且元に命じて本社、拝殿、経堂、別当坊舎（宮寺のことか）などを再興しました。それよりも前、往時の社地は広大で真言宗に属する神宮寺（その塔頭のひとつが誓願寺といい、伊加賀にある誓願寺は後身とのことです）の七堂伽藍が、現在の大阪歯科大学あたりにかけてそびえていたそうです。

近世の宮寺は片埜神社文書028（享保6年1721年）のなかで「神宮寺真言宗八幡山新坊末」と記載されており、東寺関係の真言宗であったのでしょうか。この文書は奉行所へ提出された「写し」ですが「社僧神宮寺快春」の名前が村の代表と並んで記載されています。その後慶応4年（1868年）5月の「神社寺院書上帳」には無住と記され廃寺にいたった理由の一つと思われます。廃寺のあと、薬師如来、帝釈天像などは近くの清岸寺に移されました。帝釈堂は一時、坂村小学校として使われました。

## 御殿山神社

河内名所図会に「渚院」の項があります。竹藪や樹木に囲まれた茅葺きの観音堂、社と鳥居のひなびた光景が19世紀初頭の「渚の院」跡です。

河内名所図会（部分）

「伊勢物語」第八十二段などに出ている悲運の皇子惟喬親王が在原業平らと遊んだ「渚の院」について「土佐日記」（934年）の中で歌人紀貫之は土佐国に赴任した帰途、淀川の船上で院の跡を遥かに見た感慨を述べています。それは惟喬親王が亡くなって（897年）から38年後のことでしたが「渚の院」はかなり荒廃が進んでいたようです。貫之は在原業平の「世の中にたえて桜のなかりせば春のこころはのどけからまし」の歌などを日記に書き記し偲んでいます。やがて当地にはいつのころか「渚院観音寺」が建立されます。江戸時代はじめ一時、渚村の領主となった旗本永井尚庸（なおつね　後、美濃加納藩主家となります）は名勝「渚の院」の荒廃を惜しみ、家隷（臣）に命じて桜の植樹と名文の顕彰碑を建立し、あわせて観音寺の修復（寛文6年／1661年）も行わせています。その後、これもいつの頃か寺の傍らに小倉の旧栗倉神社（あわくら　八幡

宮）の御旅所が設けられます。図会では奥まった地に「観音堂」の説明書のある建物とその右手に小さな社があり「牛頭天王」の説明書があります。当時の人は御旅所を「牛頭天王」と呼んでいたのでしょう。御旅所の前に石碑が立っており、尚庸の家臣が建立した顕彰碑でしょう。現在も残っています。古の名残の「桜」、親王の馬を繋いだという「駒留松」、渚の杜といわれた樹林、東の渚岡も描かれています。

「観音寺」には延宝9年（1681年）の寺社改で「真言宗真義城州八幡宮社僧滝本坊末、看坊慈善」がいたとされています。やはり真言宗系です。滝本坊は男山中腹にあり石清水八幡宮の社僧で文人松花堂昭乗が住職だったことがある寺です。（参考「宿場町枚方を考える会　第77号」久保山登）図会の境内には見たところどこにも鐘楼はないようです。現在の「渚の院」跡を訪ねると瓦葺の鐘楼と鐘が残っています。

渚の院跡
鐘楼と鐘

梵鐘の銘には願主として「渚院先住興善」があげられ、寛政8年（1796年）に鋳物師田中家が鋳造したとされ一方、同地に残る宝篋印塔は偶然にも「興善」のもので、宝暦4年（1754年）に死去したとなっています。この宝篋印塔は図会にもあります。興善が亡くなる前、先の住職であったときに計画し、その死後に鐘楼と梵鐘が完成したものと推定できます。1801年に刊行された図会に鐘楼が描かれていないのは、その取材が寛政8年（1796年）より前だったということでしょうか。明治2年（1869年）観音寺は廃寺となり、明治23年（1890年）、本堂は移され禁野の和田寺の建物に、本尊の十一面観音像も渚の西雲寺観音堂に移されます。

文政年間、小倉の旧粟倉神社改築の後、渚村は、「渚の院」跡の御旅所のあるところに、独立して「八幡宮」を勧請し西粟倉神社とします。明治2年（1869年）、観音寺が廃寺となりますが、同年、「西粟倉神社」は神殿を御殿山山上に造営し、翌3年、遷座、「御殿山神社」と改称して今日に至ります。同神社には「渚の院」跡を出て、御殿山に向かう鳳輦などの華麗な遷座の様子を描いた絵馬が奉納されています。絵馬の「渚の院」跡には塀際に鐘楼が描かれています。この跡地には明治24年（1891年）旧牧野村役場が建てられます。

現在は保育所や地元の集会所が建ち、わずかばかりの残地に観音寺の鐘楼と梵鐘、興善の墓標が残っているのは、興善の深い思いがなせるものでしょうか。また在原業平による美しい桜と親王の鬱屈した気持ちを詠った美麗な歌碑が建立されています。尚庸の命による寛文元年（1661年）の顕彰碑やその翻刻碑（2002年）もあり、「渚の院」の栄華をわずかながら偲ぶことができます。

## 平成30年度バス見学会　北摂の旅

# 小浜宿と多田銀銅山を訪問

八幡市　榊原　啓雄

「日帰りバス見学会の行き先探しなんて簡単…」と軽い気持ちで担当者になった私は今大いに反省しております。やっと見学先候補を絞っても創立30年を越える本会ですから、もうすでに訪問済だったということもよくあります。また、「手ごろな値段で美味しい昼食」「お土産店」「買い物時間の確保」「帰宅時間が遅くならない見学先」など、配慮しなければならない要素もあります。

旅行社や旅行好きな方に「充実感溢れる見学先はどこ?」と、執拗なまで尋ねて、ようやく訪問先が決まっていきます。今回の北摂の旅も、役員さんなどからいろいろな情報を得て、さらに2回の下見を行い、実施できたバス見学会でした。

「北摂」をネットで検索しますと、「一般的には現在の大阪府北部を指す場合が多いが、兵庫県南東部内陸の阪神北地域などを指す場合もある」とあります。今回の訪問先は後者で、兵庫県の「北摂」、宝塚市と猪名川町です。

観光パンフレットには「兵庫の北摂地域は、伊丹市・宝塚市・川西市・三田市・猪名川町の4市1町からなり、清和源氏発祥の地とされる歴史文化、清酒発祥の地とされる飲食文化、旧街道の風情が残る町並文化、日本の原風景とされる里山文化など…」などと記載されております。この見学会は、枚方市から比較的に近くて、「さまざまな魅力にあふれている地域」なんだと、改めて再認識させてもらった地域でした。

実施日の11月29日は、「午後雨模様」との天気予報でしたが、降雨の時間が夕方にずれ、訪問中は雨の影響もなく無事見学会を終えることができました。

始めに、今回の見学において研修担当だから知り得た猪名川町の観光ガイドさんの心温かい話を紹介させていただきます。

午後の見学先の「多田銀銅山悠久の館」に到着しますと、5人のガイドさんが待っておられました。下見ではガイド2人を依頼し、ガイド料はナシと聞いていた私は、「本当にガイド料ナシでいいのかな?」と心配になりました。

ガイドさんの代表によると

「今回は40人を超える参加者だから、4グループに分けた方が良いと自主的に考え、観光協会事務局として4人を配置させてもらった」とのことでした。さらにガイドさんは、「猪名川町の観光政策の伝統として、町内の歴史・観光施設を利用する人の入場料や駐車料金、ガイド料は全て無料です。心配しないでください」と話されたのです（参考午前の宝塚市小浜宿2人のガイドさんには1人2千円のガイド料を支払い）。

今回のバス見学会の費用が例年と比べて比較的安くなったのは、バスの走行距離が短かったことと、午後の見学先の費用負担がナシであったのがその理由です。「観光客に喜ばれる施設づくりは、どうあるべきか」について猪名川町から貴重な取り組みを教えていただいたバス見学会となりました。以下、各見学先を簡単に紹介します。

## 小浜宿　宝塚市

小浜宿（こはましゅく）は、有馬街道（大阪、神戸と有馬温泉を結ぶ街道）の宿場の一つです。江戸時代の摂津国川辺郡小浜町、現在の宝塚市小浜にあります。京伏見街道、西宮街道も通り、交通の要衝でした。

平安時代、小浜は周辺が陸化するまで瀬戸内海が深く入り込む浜でした。9世紀に国府が置かれ、総社・売布神社が創建されました。15世紀末、一向宗（浄土真宗）の善秀が小浜庄を開き、毫摂寺（ごうしょうじ）を建立しました。

毫摂寺

その際、周囲三方を大堀川が迂回する地形を利用して、小浜を城塞化、寺内町として一向宗勢力の拠点となり、戦国大名や織田信長の一向一揆弾圧に備えました。その後、有馬などの街道が通る交通の要衝としての地位を確立します。豊臣秀吉や秀次も有馬湯治の際に立ち寄りましたが、秀次が毫摂寺の娘を側室にしたことから、秀次失脚の折、焼打ちにあってしまいます。その後、復興した小浜は、江戸幕府からも重視され、小浜宿が成立して発展しました

## 多田銀銅山　猪名川町

多田銀銅山は、北摂地域にわたり鉱区が広がる鉱山です。その歴史は古く、奈良時代の東大寺大仏建立の際に、多田銀銅山で採掘された銅が使用されたと伝えられています。猪名川町地域では、銀山地区（旧銀山町）を中心に栄え、豊臣政権時には直轄鉱山となり、「台所間歩」や「瓢箪間歩」

など、秀吉ゆかりの間歩（坑道）が残り、盛山の様子がうかがえます。

江戸時代には幕府直轄地となり、代官所が設置され、「鉱山三千軒」と言われるほどのにぎわいを見せ、我が国の鉱山史の一端を担いました。平成27年10月7日に国の史跡に指定されています。

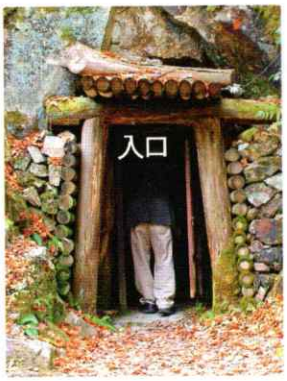
**多田銀銅山悠久の館**

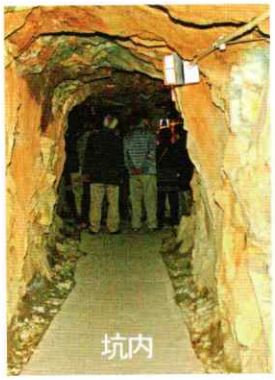
多田銀銅山の歴史を紹介する施設です。絵図や古文書、鉱石、鉱山道具などの資料を展示しています。

道路を挟んだ対面には「悠久広場」が設置され、明治時代に設置された堀家製錬所跡のレンガ構造物が展示されています。

**青木間歩**

周囲にアオキが茂っていたことからその名が付いたと言われています。




＜青木間歩＞

江戸時代に採掘されたと思われる手掘りの露頭掘りと、削岩機などの機械を使って採掘された坑道との両方が楽しめます。唯一、坑道内を体験できる間歩です。照明設備もあり、午前9時～午後5時まで自由に見学できます。なお、坑道は江戸時代に「間歩（まぶ）」と呼ばれていました。

多田銀銅山「悠久広場」

## 近郊の史跡を歩く会

# 橋本から楠葉へ

三栗　石川　勲

平成30年度の「近郊の史跡を歩く会」は、春の「茄子作・私部」に続き、秋は「八幡市橋本から楠葉」を訪ねました。

9月23日午前9時半、会員など36人が京阪橋本駅上り改札口前に集合し、橋本の街並みを見ながら「柳谷渡し跡」に向いました。

### 柳谷渡し碑

かつて橋本には淀川の対岸、山崎と結ぶ橋がありました。古くは奈良時代の僧行基などが架設したとされ、「日本三古橋」の一つといわれています。しかし、洪水などにより流失と架橋を繰り返し、江戸時代の元禄年間に架設されたのを最後に、以後、渡船が橋の代わりを担いました。その船着場が柳谷渡しで、石碑は明治2年に道標として設置されたものです。風化のため読みにくいですが、「柳谷わたし場」などと記されています。柳谷は柳谷観音の楊谷寺（長岡京市）に由来しています。なお、渡船は上流側に「御幸橋（ごこうばし）」が開通した後も運行されていましたが、昭和37年に廃止されました。

淀川の堤防（府道京都守口線）から見た柳谷渡し碑（赤○）

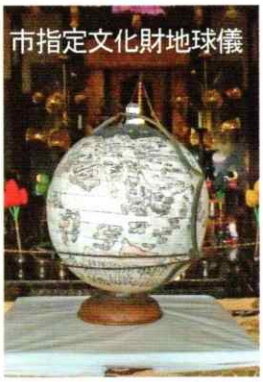
### 久修園院

久修園院（くしゅうおんいん）は枚方市楠葉中之芝2丁目にある真言律宗のお寺で、本山は奈良の西大寺、その別格本山です。縁起によると、行基が霊亀2年（716年）に開基、神亀2年（725年）に落慶しました。

行基開基の寺院は全国に約六百あります。しかし、史料

がなく、高徳の行基への追慕による伝承といわれています。久修園院は安元元年（1175年）に編纂された行基年譜の天平十三年記に記されており、信頼性が高く、前述の山崎を結ぶ橋の建設に伴った建立とされています。

広大な寺院でしたが、元和元年（1615年）の大坂夏の陣により多くの塔頭と七堂伽藍が焼失しました。これを延宝年間に再建したのが宗覚律師で、師は久修園院の中興の祖と呼ばれています。師が元禄年間に製作した天球儀と地球儀は枚方市の指定文化財になっています。

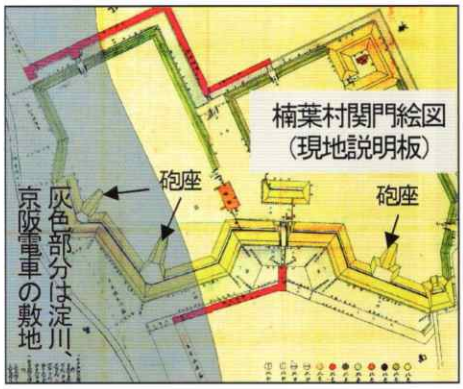



## 楠葉台場跡

久修園院と同じ楠葉中之芝2丁目にある砲台場（大砲を備えた要塞）跡です。

京都守護職松平容保（会津藩主）の建白により、勝海舟を設計の総責任者として建設され、慶応元年（1865年）に完成しました。西洋の築城様式である「稜堡式」の陣形で面積3万8000㎡、高い土塁、深い堀、砲3門を備えていました。

築造の目的は、開国を求める外国船の京都侵入を防ぐためとの話ですが、実際は京街道を曲げてまでして、秘匿すべき軍事施設の台場内を通過させており、尊王攘夷派浪士の京都流入を取り締まる関所の役目を担っていました。




楠葉台場が実戦に使用されたのは鳥羽伏見の戦い（慶応4年／1868年）です。鳥羽・伏見で劣勢になった旧幕府軍は、老中稲葉正邦の居城である淀城で態勢の立て直しを図ろうとしますが入城を拒否され、やむを得ず、橋本陣屋と小浜藩が守備する楠葉台場に入りました。

対岸の高浜砲台は、その忠誠心から家康の信頼が篤かった藤堂高虎を藩祖する津藩が守備していました。しかし、新政府軍に寝返り、橋本陣屋と楠葉台場を砲撃しました。旧幕府軍は応戦しましたが、予期せぬ攻撃を受けて戦意を喪失、退路を絶たれることを恐れて台場を放棄し、大坂へ敗走しました。

空き家となった楠葉台場は新政府軍が接収、後に民間に売却され、明治の末期には淀川の改修、京阪電車の開通などにより姿を消してしまいま

した。

枚方市教育委員会は、古文書から楠葉台場の位置を特定し、平成19年から翌20年にかけて発掘調査を行ないました。国は平成23年2月7日、「臨海ではなく、内陸河川沿いに築造された台場としては珍しく、幕末の緊迫した政治・軍事状況を理解するのに重要」として「史跡名勝天然記念物」に指定しました。平成28年9月1日からは楠葉台場跡史跡公園として市民に開放されています。

## 久親恩寺

久親恩寺（くしんおんじ）は楠葉中之芝1丁目にある曹洞宗のお寺で、本山は福井県にある永平寺です。本尊は薬師如来。鳥羽伏見の戦いの兵火により消失し、さらに平成27年には漏電により庫裏が焼失しましたが、すでに建て替えられています。境内に樹齢600年の楠があり、火事の影響を受けましたが、翌年には新芽を吹きました。次項の楠玉龍神の楠と夫婦樹木といわれています。

久親恩寺は俗に楠葉道心の寺と呼ばれています。道心の俗名は篠崎六郎左衛門久親、彼は楠正成の三男である正儀の家臣でした。楠葉の出身で延元元年（1336年）、妻子を残して出陣しました。残された妻が病に罹り、娘の平癒祈願も空しく亡くなりました。

寺伝によると娘は出家して篠崎禅尼と称し、母の冥福と父の長寿を祈り続けました。その孝行心から山号を大孝山、寺号は父の篠崎久親の名から久親恩寺になったといわれています（諸説あり）。境内入口の左に篠崎道心と禅尼の墓石が設けられています。

篠崎道心と禅尼の墓石

彼女が祈った寺宝の薬師如来は行基の直作といわれていますが、久修園院からの譲渡品ではないかといわれています。

なお、楠葉台場の工事を担当した役人の会議などはここ久親恩寺で開かれました。

## 楠玉龍神

楠玉龍神（くすたまりゅうじん）は町楠葉2丁目にある小さな祠です。マンションの敷地内にあり、生垣に囲まれているため気付かない方も多いのではないかと思います。

祠の右横には、久親恩寺との夫婦樹木といわれる楠があります。

## 樟葉天満宮趾

町楠葉1丁目にある石碑です。樟葉天満宮は、淀川が洪水のとき、松の木に引っ掛かっていた箱の中から天満宮の尊像が出てきたので、松の傍らに祠を建て、氏神にしたのが始まりと言い伝えられています。明治の神仏分離令により交野天神社（楠葉丘2丁目）に合祀されたため跡地に石碑が建立されました。

松の木は跡地に残っていましたが、巨大かつ老朽化のため倒壊の恐れがあり、昭和46年の樟葉駅移転に伴う拡幅工事により伐採されました。神木として崇敬されていたため切り株は現在も線路脇に保存されています。石碑には「天満宮の趾」、その脇に「大松の碑」と記されています。

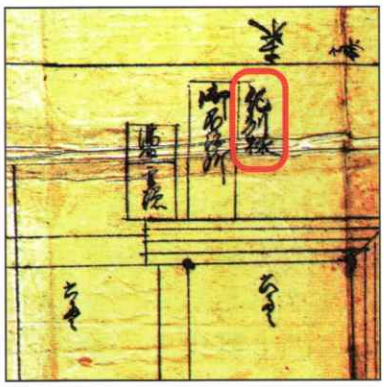
松の切り株

## 小休本陣米谷家

小休とは参勤交代中に休憩して間食をとることで、小休本陣米谷家は紀州徳川家の私的な施設でしたが、他の大名、幕府の役人も利用していました。町楠葉1丁目にあり、京街道の往還筋に面しており、本会会長を6年間務められた現在の当主、米谷三男さんが暮らしておられます。ただし、小休本陣本体は鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍が一帯に火を放ったため焼失しました。現在の玄関の奥に大きな木（左写真）がありますが、かろうじて兵火を免れたそうです。

玄関脇の木

当時のご当主は、事前に仏像、位牌などを持って避難されたそうで、その中には小休本陣の間取図も含まれ、図面には紀州様（下記画像の赤○）と書かれた部屋があり、殿様の御座所と思われます。



## 建長寺

町楠葉1丁目にある浄土宗のお寺で、八幡市橋本にある西遊寺の末寺です。建長2年（1250年）に来日した南宋の蘭渓道隆（臨済宗）が草創しました。以後、300年間は禅宗のお寺でした。本尊の阿弥陀如来は禅宗時代の本尊で、慈覚大師の作と伝えられています。

慶長19年（1614年）に

函蓮社文誉歴大和尚が浄土宗に改めました。堂宇は幕末の鳥羽伏見の戦いで焼失しましたが、本尊は難を逃れました。その後、学誉常快和尚が再建しましたが、昭和9年9月の暴風雨により本堂、庫裏が倒壊しました。昭和32年4月、順誉芳孝和尚により再建され現在に至っています。

薬医門と呼ばれる建長寺山門

山門は「薬医門」と呼ばれ、表側と裏側、それぞれ二本の柱で屋根を支える構造になっており、棟は少し前方にあるため、表側の柱の方が太くなっています。

## 樟葉駅前広場

今回の最終見学地は樟葉駅前広場にある「楠葉牧」のモニュメントです。

モニュメントには、楠葉の地名が古事記や日本書紀に記されており、継体天皇の樟葉宮があったこと、平安時代には摂関家の牧場（後に荘園）である楠葉牧があったこと、さらに梁塵秘抄（平安時代の歌謡集）に収録されている楠葉牧での土器作りに携わっていた娘の歌などが説明されています。

モニュメント

## 機関誌の文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありますが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

## 会員の皆様へ

枚方市駅東口改札前にある「ひらかた観光ステーション」でのお買い物のとき、「宿場町枚方を考える会」の会員ですと言っていただければ、商品により割引がありますが、ご利用ください。

## 会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会の実施、機関誌（本誌）を発行しています。

会費は３６００円（１年度）です。入会をお待ちしています。ご希望の方は上野まで。電話（８３２）５７２２。